



Title	中井竹山葬儀記録
Author(s)	山中, 浩之; 小堀, 一正
Citation	懐徳. 1985, 54, p. 84-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

資料報告 中井竹山葬儀記録

小 堀 一 正

(2) 葬列供役人名書付 (同前)

二枚

(3) 葬儀行列

一紙

(4) 三虞朝夕奠品案

横帳一冊

(2) 中井斂庵夫人葬儀記録 (天明五年八月廿六日歿・七十

四歳)

(1) 貞範嫗襄事記 (淨書)

横帳一冊

(2) 貞範嫗襄事記 (下書)

同 一冊

(3) 中井蕉園葬儀記録 (享和三年八月四日歿・三十七歳)

(1) 文明先生襄事錄

同 一冊

(4) 中井竹山葬儀記録 (文化元年二月五日歿・七十五歳)

(1) 文惠先生襄事錄

同 一冊

(2) 御悔名簿

同 一冊

(3) 香儀簿 (もと表題なし・葬儀行列下書と合綴)

同 一冊

今年度は中井竹山葬儀記録の全容を御紹介できることとなつた。この記録は昭和五十九年、新田和子氏（故中井終子氏養女）より、懐徳堂記念会に正式譲渡された懐徳堂関係資料のうち中井家歴代葬儀記録の中に含まれるものである。すでに加地伸行教授によつて一部紹介がなされているよう（本誌第五十二号）、これはまことに稀有な記録であり、葬儀そのものの具体的記述とともに、それに参列した人々の名が記されることで、懐徳堂の人間的社會的なつながりを考えて行く上でもきわめて貴重な記録である。この歴代葬儀記録の全体は次のような内容からなる。

(1) 中井斂庵葬儀記録(宝暦八年六月十七日歿、六十六歳)

(1) 焚香次第 (もと表題なし)

一枚

(4) 竹山先生三虞朝夕奠

同 一 冊

(5) 中井履軒葬儀記録（文化十四年二月十五日歿・八十六歳）

同 一 冊

(1) 文清先生襄事錄

同 一 冊

(2) 香儀簿

同 一 冊

(3) 追念記器（遺物分配記録）

同 一 冊

(4) 三虞朝夕奠品案

同 一 冊

(6) 中井柚園葬儀記録（天保五年五月廿一日歿・五十三歳）

同 一 冊

(1) 専直先生襄事錄

同 一 冊

(2) 到來控

同 一 冊

(3) 柚園先生葬式調物控

同 一 冊

(4) 柚園先生葬儀行列

同 一 冊

(7) 中井柚園夫人葬儀記録（文化十年十月五日歿・二十五歳）

同 一 冊

(1) 専直夫人貞柔襄事錄

同 一 冊

(8) 中井碩果葬儀記録（天保十一年三月廿四日歿・七十歳）

同 一 冊

(1) 文正先生襄事錄

同 一 冊

(2) 三虞朝夕奠

同 一 冊

(9) 中井碩果夫人葬儀記録（安政六年七月八日歿・七十九歳）

同 一 冊

(1) 御悔名簿（表題なし）

同 一 冊

と題する詩があり、「末疾支離、すでに浹辰（十二日間）、起居眼食、傍人を情う」（『墓陰集』卷四）とみえ、手足が相当衰弱していたことがうかがわれ、さらに同年八月の長子蕉園の死は氣力をも衰えさせるものであった。心痛と衰弱が重なり、文化元年に入るや泄瀉・痰喘などを伴ない、二月五日息を引き取つたのである。竹山ははじめ文桓先生と謚されたが、履軒の議によつて文恵先生と改められ、誓願寺に葬られたのである。

その埋葬の方法や葬儀の実際については眼前に見ゆるよな具体性をもつて襄事録に記される。儒葬であること、寺院関係は誓願寺一寺のみであることなど竹山が『草茅危言』（「送葬」の項）で記していたあり方と合致する。混雜を避けよといついた点はかなりの役割配備をもつて配慮されてはいるが必しも十分ではなかつたようである。その際、升屋・尼崎屋・播磨屋など有力同志が葬儀を取りしきつてゐる様が如実に知られるであらう。

「御悔名簿」には一九七名が記され、「香儀簿」にはのべ一七三名（重複をふくむ）がみられ、数多の会葬者・弔慰者の名前を知ることができる。それらの人名は懷徳堂につながる人々を確定してゆく上で重要な手がかかる。

この記録は葬儀当日直後に作成されたもののように、みられる人々も大阪およびその近辺の人々にはば限られているようであるが、たとえば頬春水のように「隔境之義、官禁も有之、執紳（柩をもつこと）会葬することを得ず、年来之交宜において遺憾至極奉存候」（『文奎余光』所収）というような人もおり、種々の理由で参列しえなかつた人々も多かつたものと推察される。

かつて、今はなき柿衛文庫主岡田利兵衛氏を伊丹に訪問したとき、氏は大正のころ、中井家の末裔中井木菟麻呂氏の訪問をうけたことを話された。木菟麻呂氏は、中井家歴代の葬儀記録を持参し、葬儀に参列した門下知友たちの子孫宅を訪ね歩かれていたのであった。岡田氏はその葬儀記録を実際にみ、氏の先祖（鹿島屋利兵衛）の名を確認したことを話された。このお話を聞いて以来、

りになるものと思われる。葬儀に携わつて立ち働く一人の位置と役割からかれらの相貌を想像することもできようし、また会葬者の名前の背後にかれらの懷徳堂への関わり方をさぐつてみるとことも興味深い作業となるようと思われる。その意味でこの記録は竹山の死についての記録であるとともに、懷徳堂に関わつて生きていた人々の記録でもある。

その記録がまだどこかに現存しているとの思いを強くいだきつづけていた。それを今こうしてここに紹介できることをうれしく思う。と同時にこの記録が出現した以上、現在では甚だ困難になつたとはいえ、木菟麻呂氏に

文惠先生裏事錄

(表紙) 横帳一冊

文惠先生裏事錄

享和甲子二月五日正午時終焉私謚曰文惠先生

司書

長谷川小右衛門

西島立敬
中川元吾

司貨

牧熊藏
同新三郎
同善四郎

行司

訃告

謫喪
古林溫秀
并河誠輔

訃告案文

以手紙致啓上候、然者竹山先生御病氣御養生不相叶、
今五日午時死去被致候、此段為御知申上度如此御座

ならつて御子孫宅を探し尋ねることも不可能ではなくなつた。そのためには多くの方々の御教示御協力を必要とする。この場をかりてお願い申し上げたいと思う。

候、已上

学校行司

尼崎

国分

猶々御葬式來九日ハツ時之積ニ御座候、已上

田 中 純 治
柘 植 中 務
足 達 重右衛門
花 崎 彦 六
古 林 章 甫

右為相知候名當

京都之分

太 田 碩庵

并 河 丹 波 介

三 木 佐 渡 守

小 山 伊 三 太

大 村 彦 太 郎

革 島 新 五 郎

中 原 敬 作

北条村 善根寺村

生駒

五 条

龍 野

河 高

家 原

池 田

住 吉

同

横 谷 東 馬
中 井 玄 亮
原 文 四 郎
安 達 勝右衛門
荒 木 善右衛門
小 倉 周 藏
神 奴 將 監

右名前之分、太田碩庵氏方壱封口達相頼遣申候処、返

書無之、一統心配之上七日晚方別飛脚藤兵衛さし登し

申候事

其外遠方之分追而為相知申候事

公辺届向之事、岡橋文助八田五郎左衛門氏方為聞合申候処、御隠居之義故御届ニ者及間布由申居候事

諸屋敷方切紙申達候事

町家懇意の方回状順達

同志親類分者御大切之碑、使者ニ而召集申候事

伊丹之分

初終之日大塚千太郎被見廻申候ニ付、其地社中口達相頼候

町内年寄川井氏へ即日口状ヲ以相達申候事

門鎖六日朝々十一日迄

両中井

古林

并河

自六日午至九日夕

治棺五日七ツ時申付ル

寸法

高サ三尺

横武尺

長サ武尺三寸

厚サ壹寸六分

瀝青

外面六方内面四隅及ヒ底厚サ五分底之外面斗リ厚サ

壹寸余瀝青惣目九十二斤

灰隔壠組内矩

松材厚サ壹寸高サ四尺方三尺五寸

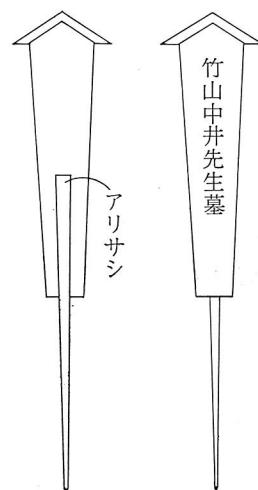
帳場札幅四寸長壹尺三寸

休息所札幅六寸長壹尺五寸

墓標

筆者早野義三

喪服 古林出入大和屋孫兵衛へ申付ル



(ここに素興が入る)

拵地

早野義三
久兵衛

貞淑様御碑之左傍素ノ設ケ被置候所

穿壙

寺ノ手伝へ申付ル

深サ壹丈六尺

拵地之上互ニ付置候事

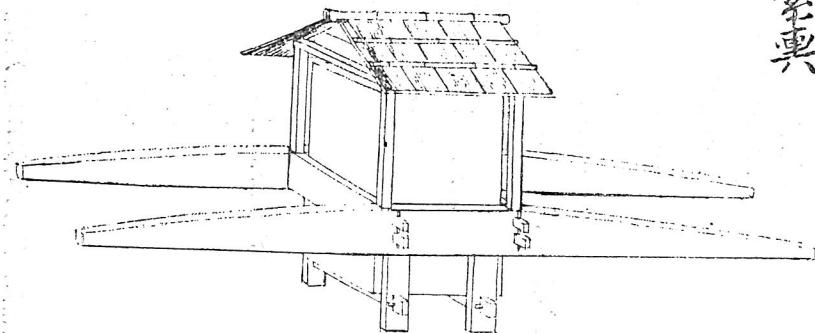
石灰二石

砂利二十荷山荷

細炭六俵

右石灰砂利者皆寺へ相頼候、細炭者堀江備前屋忠右
衛門ニ而相求、以仲仕寺へ預申候

素興



上下丹波布を用

一

服白縞ノ單衣
帶白縞

右三品孰茂裁チズテニ而斬衰ノ意ヲ存ス
右喪主七郎分

神主 木村平兵衛
執筆早野義三 申付ル

沐浴襲歛之具

沐浴	手盤
帯繩	手巾
一	一
剪刀	櫛
一	一
剃刀	一
一	一

関佐平
ふさわ
ぢいや

大歛

古 林 温 秀

并 河 誠 輔

田 中 純 次

中 川 元 吾

石 野 充 藏

早 野 義 三

中 川 元 吾

石 野 充 藏

早 野 義 三

佐 兵 衛

佐 兵 衛

棺 中 七 星 板 之 下 石 灰 一 斗

充 囊 長 短 二 百 五 十

棉 褥 充 以 桐 木 脣

布 紋 木 線 一 段 四 裁 用 之

木 棉 一 段 別 二 両 截 シ 四 ツ ニ 相 置 ミ 紋 ノ 裏 ヘ 十 字 二 縫

付 ケ 布 条 ト ス

時 服 熨 斗 日 常 紋 付

下 著 浅 黄 無 垢

繡 絆 花 色 白 巾

禪 新 製 白 加 賀

深 衣 莹 黄 繞 線 玄 繻

帶 玄 七 子

獻 花 色 種 父
鬱 金 加 賀 紺

拜 領 御 紋 付 御 著 用 有 之 故 歛 ニ 加 ル 者 也

儀 刀 二 大 工 太 右 衛 門 ニ 命 ス

摺 扇

握手 用 加 賀 紺

帳 目 同

加 賀 紺 右 三 品 及 ヒ 禪 ニ 而 凡 一 丈

仮 輪

帳 目 同

加 賀 紺 右 三 品 及 ヒ 禪 ニ 而 凡 一 丈

涕 紙 小 菊 一 帖

沐 櫛

脣 帶

剪 爪

生 時 髮

印 章

文 曰 享 和 甲 子 七十五 庚
朱 字 又 一 顆 曰 積 善 白 字

筆 一 対

研 一 面

墨 一 顆

研 一 面

墨 一 顆

紙 二 卷

右 五 品 痘 前 創 制 ニ 而 一 小 箱 ニ 備 具 ス、 直 ニ 是 ヲ 用 ュ

煙 草 囊

煙 管 陶 器

右二品生前御好嗜候物故新趣意ニ而加之

棺蓋 文丸川茂延
書早野正巳

易簣之前一日偶然被來候故、文之義相賴申候

文惠先生柩

先生諱積善字子慶姓中井氏称善太号竹山一号同閔子考
龜菴夫子諱誠之妣植村氏季二男先生其適也夫子之創府
庠也万年春櫻二先生相続教授先生受之異學時盛因有非
徵之述天下靡然嚮正

東照大君開國之烈載籍不明故有逸史之撰捨虛取實名分

以正

官嘉其績賜以章服其余著撰不止十數部為人曠度淵識英

邁絕倫慈惠好与專以斯文為任修己有法教人有則精修勤

勑老而益壯配革島氏生九男四女先先生歿告老自称潔翁

授庠務於第四子曾弘未數歲而歿第七子曾縮代受焉季女

帰并和尚誠生二男一女而亡其余皆夭孫男二人女四人存

者僅三女以享和四年甲子二月五日終去生享保十五年庚

戌七十有五年葬誓願寺先塋之次私謚曰文惠

柩ヲ下ス節ハ杉丸太一本壙上ニ横タヘ、柩ハ素輿ノ
併其上ニ安置シ、大工太右衛門治兵衛兩人心ヲ揃ヘ
静ミト素輿ヲ解ク、四方ノ人々謹テ縛ヲ執ル、於是
兩人ノ大工万力ノ縛ヲ執リ徐ニ是ヲ引ク、四方ノ人

八日四時誓願寺吊ニ来ル
線香持參棺前一拜梵音兩三声尤低音ナリ

右之節寺僕ニ鳥目百文遣ス

銘旌

墓標ヲ用ヒ墓ノ字ヲ奉書ニ而包ミ柩ノ字ヲ書ス

築壙

旧例柩ヲ下スニ縛而已ヲ用ニ、此度之柩格別重キニ
因リ穿壙之時ヨリ預メ杉丸太ヲ以壙上ニ架シ繡車ヲ
繫キ湧泉ヲ汲出シ壅埋ノ節者縛車ヲ脱シ俗ニ云万力
ヲ繫キ執紳ノ力ヲ分ツ

巨縄ハ
新キヨリ
ユ
ナハノ
ツルヘ
ノ
巨縄ハ
新キヨリ
リ
万力ヲ是ニ掛クル

万力ノ外巨縄二条ヲ壙上ノ木ニ掛ル、

壙中新制ノ樽ヲ下ス制ハ条例ニ審ナリ、樽ノ四傍石
灰砂利ニ而堅ク築キ置キ、樽ノ内板ノ間隙咸ク子リ
ニ塗ル、底ニ敷クニ細炭ヲ以ス、炭凡三俵炭ノ上
石灰砂利樽外同様、

モ共ニニ縛ヲ挙ク、柩底上ル下二三寸乃チ丸太ヲ取

ル、衆人一斉ニ力ヲ籠メ柩ヲ墳底ニ下ス、柩墳底ヲ

去ル事一尺四方ノ位ヲ定ム事便ニシテ心配少ナク術
簡ニシテ万事能片付タリ、往々并河氏ノ指図ニ出
ヅ、後世法トスヘシ

棺ノ下傍四縛ヲ貫クノ環アリ、然ルニ棺外皆瀝青ア
レハ環ノ根本ニ入ル事深カラス、且柩モ格別ニ重キ

故四縛巨縛ニ皆棺底へ回ハシ環ヲ頼ミニセズ

柩樽ノ間石灰ジャリヲ入レ海部丸太四本ニテ手ゴト

ニツキコミニ十分ニ堅カラシム、右石灰ジャリ何レモ

水ヲ用ヒス其マ、ニテ用ニ、土地ノ湿リニテ自然ニ

シマリ可申、モシ水ヲ用ヒ候ハ地中ニテ灰ノアクヌ

ケ可申候由老年功者之手伝兼而聞候、此度其義ニ從

ヒ申候

右海部丸太大工太右衛門申付前日ヨリ遣シ置

柩上灰ジヤリ厚サ一尺余、其上ニ細炭三俵ヲ施ス

墳中ノ土地面ニ至ルマテ隨分カタクツキコミニ水氣ヲ

含ミ不申様致候

九日午後早帳場之人數遣ス

但シ前例四ツ時可遣處、遲刻ニ相成リ会葬之人大分

待合セ候様子ニ御座候事

帳場者誓願寺門前北之方溝之上ニ足なしの床几式脚

わたし絵筵ヲ布申候

右絵筵即日持帰ルベキ处失念致候ニ付紛失ニ相成候

事

布施庄左衛門

手代

尼崎屋七右衛門

手代

伊勢屋藤四郎

手代

播磨屋与市

手代

播磨屋九郎兵衛

手代

福嶋屋吉之助

手代

同家僕壱人

右帳場一切福吉引請

此内福嵩屋ノ
武人手明キ

食事福吉々遣ス

又手代 壱人

右休息所一式舛平引請

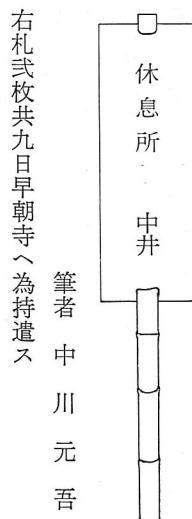
行列奉行

道筋

門内繰出し長谷川小右衛門
門外見縛 中井要藏
田辺屋仁右衛門

同

行列



右札式枚共九日早朝寺へ為持遣ス

筆者 中川元吾

休息所 實相寺

応接者

舛平手代 武人

千草屋新三郎

麻上下半股立鞋履
喜八

侍

荒木敬治 同
角田才治郎

墓標

杉山庄兵衛 同
渡邊貢藏

柩

石野十蔵 同

羽織一刀
治兵衛

麻上下半股立鞋履
伊右衛門

塾生 同

佐藤雍藏

奥村弥二郎 同

墓標

出門、東江せんだんの木橋筋、南江高麗橋筋、
難波橋、南江安堂寺町、東江上本町、南江
誓願寺

若党 鉢持

草履取 挾箱持

以上

空艸^{ハコ}一
温七郎

導師門前迄迎
燒香列

中井七郎

中井雄右衛門
并河小一郎

当日病氣不蒞
内少付名代
幼少二而燒香ス

并河新五郎
草島肇

留主人

礼場寺内

香可被成候

以上
雄右衛門
小一郎
秀蔵
淡輪軒先
西島橋丈立
岡田敬輔
履元元
生潜生

以上

但し同志塾生其外門下之輩、都而内二而燒香ス

出棺前玄関へ張紙し寺ニ而之燒香相断候事

門人中燒香寺ニ而者混雜可仕候間、此所ニ而御焼

玄関番
家内惣世話

岡田直藏
田辺屋仁右衛門
同為五郎

下之分

はりまや

文

料理方

佐
惣

八百
弥

大
忠

助
助

帰後夜食可出人數

親類同志別懇之内并遠方会葬之人

右同志中者遠方トテモ枉テ一同被帰候様申候事

寺へ遣ス物

米七升

煮ズ

香のもの

右之品九日午時平兵衛ニ為持遣ス、是ハ築埋之後親

戚并ニ世話方人数斗リ相用可申備ニ御座候へ者築埋

中々炊飯

寺ニ而世話方

山西宗五郎

上村屋幸助

一紀国屋六左衛門、神崎屋清助右兩人九日朝々参り寺之

見繕墓所見分等相頼申候事

茶船壺艘

右内ニ而持ル

香のもの

坪 酒麴生姜

右并河々来ル
平くわへ
さゝがき牛蒡

猪口 胡麻味噌あへ
蓮根独活こんにやく
右式種古林々来ル

料理献立

汁若和布

凡百五十人

雇ヒ人

休息所応接之人

借り人

帳場之人

但し坪者上分五十人分斗リ下之分斗酒壺献さし

出ス、是者到来之酒ニテ相済

二月十日
誓願寺御納所

外ニ武百文垣外番人へ

十日寺へ施物遣ス

目録

一金武百疋	御導師様	壺封
一銀三匁	御役僧様	四封
一銀式匁	御小僧様	壺封
一銀三匁	御同宿様	同
一銀式匁	墓御経料	同
一銀三匁	挾箱料	同
一銀式匁	几杖料	同
一南鎌壺片	御台所茶料	同
一銀三匁	実相寺御茶料	同
一南鎌壺片	七々日忌志	同
一齎米七升	同七々忌志	同
一鳥目五百文	盛物料	但シ
一同 武百文	御家来ヘ	一百四十文
一同 武百文	雇老婆兩人ヘ	一百四十五文
右之通り御受納可被下候		一百四十九文

中井七郎

一壺貫三百五十武文

土長

但シ
一百四文
一六十四文
いとつな武ツ

一百六十八文

八百安

日雇式人事
但シ掃除小遣等ニ使ウ

一壺貫五十五文
寺手伝清五郎

寺ニ而拵申候分
穿擴人足

一四貫文

定格三貫文ニ而相済申候処、此度者場所手広ク人足格別

余計ニ相掛候ニ付壺貫文増遣ス事

寺手伝清五郎

一百十武文

床三枚かり貯

一百九十九文

丸太九本かり貯

一五十五文

繩

一百十四文

綱武本

但シ砂利二十荷代

一 壱貫四百四十八文

但シ

一九百四十八文

墓所跡片付
手伝四人

一三百文

寺之男武人

一武百文

手桶壹つ

一三十六匁

灰屋喜兵衛

但シ石灰武石代

一六十文

京屋新兵衛

但シ花竹代

一 壱貫三百六十四文

舟屋善兵衛

但シ六百八十文九日帰り之船

又六百八十文十一日家内寺参之船

一十五匁

吉野屋政七

但シレンジャク毛棉式反代

一 四十武匁壹分

美濃屋左兵衛

但シ先払一人

若党武人 同

同

宰領
明手武人

同

一 壱貫武百三十武文

但シ興夫十六人

壹人前三百文ツム

供駕五人

同

一九百三十武文

但シ式十八人髪結代

一 壱貫文

右輿夫十六人へ酒手ニ遣ス

一 南鎌壹片

左兵衛心付

一 銀三匁

但シ十七匁五分

但シ牛黃半兩代

一 三十八匁

大和屋孫兵衛

但シ拾匁武分

一 武匁

一 壱匁五分

白縞布壹反代

同帶五尺代

一 八匁三分

喪服仕立代

一 武匁九分

丹波布壹反

同足し切レ

一 武匁五分

上下仕立代

一 四匁武分五り

白加賀五尺

一五匁五分 同五尺

右武口者眞目仮纏握手領鼻襪之用

一八分五り 白縞布武尺

右喪主雁来痘ニ付臨時申付候脚袴切レ

一武百十八匁武分

但富平材木代

大工多右衛門

一五十九匁四分

同人作料

但シ一四十六匁五分 手間十五人

一十武匁九分 夜仕事手間三人

一南鎌老婆片

利右衛門へ心付

一十五匁五分ハリ

釘代 細炭六俵

一十八匁武分

但し壹俵ニ付武匁八分替

壹匁四分駄賃

かしふとん代

一武貫四百三十六匁

袴仁

一百武四十文

桐鋸屑老婆石

一六匁五分

穀皮代老婆石

但し神主代

一武匁八分

右神主靈筵

尼七紙代

一百七十五文

右七星板下之物

石灰老婆石

一四十八文

但し八文不足

一七十文

右沐浴之用

一十六匁五分

右綿之用

一四百文

右御吊悔之常供

一武百文

右者瀝青之時分入用

一五十匁八分七リ

近江屋弥兵衛
右者瀝青十四貫八百匁_{二付}五分五り替

一百武十四文

帳場へ遣ス小遣

一三十七文

元結代

蒲筵代

尼七紙代

右七星板下之物

石灰老婆石

陶烟管

桶

細引四百五十匁

京都飛脚小遣

誓願寺男

泥鑊かり代

京都飛脚小遣

近江屋弥兵衛

右者瀝青之時分入用

近江屋弥兵衛

右者瀝青之時分入用

近江屋弥兵衛

右者瀝青之時分入用

近江屋弥兵衛

右者瀝青之時分入用

右者股立之用

一 武百文

一 三匁

一 武百文

片挾箱かり貢

会所周助

下役式人

町垣外番

町髮結

草履八足料

墓参包銀武ツ

但し草履五十足草鞋百足到来之不足

墓参包銀武ツ

右者十一日家内墓所拝礼之用

一四匁

初メ桐木屑一石篩ニカケ炮焰ニテ乾シ紙囊百五十

ニ充テ用之、柩格別ニ大キミユヘ大ニ不足、大歎

夜ニイリ候ユヘ桐木屑難調、翌穀皮ヲ一斛ヲ求メ

紙囊百五十ニテ充之少々余候

一八日素興出来上リ候得ハ柩ヲ西夾ニ安ス、是ハ火事

ノ備ナリ、奠物焼香等皆文明君ノ例ニ任ス

一墓所入口竹垣之事

旧例無之、但シ築埋之節会葬之人多く入来り難渋

ニ付、此度本堂之横手ニ垣ヲ設ケ親類之外一人モ

入不申候、入口ニ者山片平右衛門嚴く人ヲ塞キ被

申候、同志之者も不入來候、後に者塾生四人此所

ヲ守ル、依之テ築埋心静ニ相調ヒ万事行届キ甚宜

候、永例ト成ヘシ

一大歎之事

楼上ニテ易簾ニ付、沐浴後柩ヲ二階切落シ之木口

ニ安置ス、上ハ万力ニテツリ、下ハ丈夫ニカイ物

ヲ置キ、少シモ動カニ様ニ縛ヲ以テ四方ニユイツ

ケ蒲団ノマム柩之キハニ安シ、柩之上一板ヲ設ケ

布絞ノ四端及布条ノ四端ヲ手ミニ取り戸ヲ板上ニ

置キ板ヲユキ徐ニ歎ム、充囊ニテ半ハツメ仮ニ蓋

ヲ置キ扱万力ヲ掛ケ縛ヲ取り徐ニ下ス、甚ヨシ、

一充囊

条例

一 淋浴

一 穿壙

一 潤青

右三事總テ文明先生ノ例ニ従フ、少々之異同ハ別

ニ審ナリ

一 素輿

文明君之例ニ従フ、少々不宜所更ニ新製ヲ用ニ、

寸方製度前岡ニ審ナリ、切ニ新製ヲ用ヒ旧製ニ従

フマシキ事

一 充囊

一 充囊

一 充囊

以テ永例トスヘシ

モシ樓上易簾ニアラズトモ床ヲ切テ柩ヲ下シ歟

スペシ

一瀝青之事

中橋筋淡路町北へ入ル西側近江屋孫兵衛ニ申付ル

鍋竈共ニ持参

瀝青かけ候者不案内故大工ニ命ス

一通

右同志名宛左之通御認有之候
金崎 七右衛門 山片 平右衛門

藤田 九郎兵衛

山片 平右衛門

池 上 吉 兵 衛

永井 藤四郎

加 藤 原 助

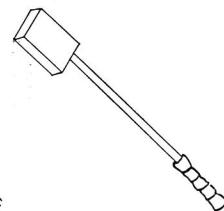
黒田 弥太郎

長谷川 七郎右衛門

藤田 忠右衛門

古 林 温 秀

并 河 誠 輔



こての図

右こて鍛治屋ニテ借り火ニ焼キ瀝星^(よ)かけ候上くる

いを直し候

一神主之事

旧例墓所へ持参候所、履軒先生御説ニ古礼右之義

無之旨被仰聞候ニ付相止メ、虞祭迄包ミ置虞祭之

節始而取出し靈座を設候、可以為永則

遺書四通御死去之前寛政庚申之歲御
病中ニ出来候分

一通 履軒先生

一通 側婦

一通 遠藏七郎

一通 同志中

右同志名宛左之通御認有之候

山 中 和 二 郎 格別之仔細有之間
別翰ニ而右連名状之後ニ
繫キ有之候

右遺書中趣意ヲ以送葬之節同志中行列ニ加ヘ申候

但シ金崎七右衛門事先達御死去、當時七右衛門弱年

ニ付列位指替ヘ申候

和二郎事も先達御死去、當時惣太郎へ家督相続故遣

書行列名前相違有之候

池上吉兵衛永井藤四郎当病ニ付不臨候、藤田忠右衛門先年死去被致候

(表紙) 横帳一冊

竹山先生御悔名簿

御悔名簿

竹山先生

荒木敬治	浅野屋与兵衛
池内八兵衛	ますや貴太郎
淡路屋弥太郎	篠崎長左衛門
平野屋政次郎	吹田屋彦三郎
平野屋松三郎	かしまや伊介
。菱屋多兵衛	落合鷹之介
山西宗五郎	三宅幸蔵
藤屋五郎左衛門	寓佐美治兵衛
。麻田立達	団扇堂惣兵衛
日笠喜代治	鴻池与兵衛
明石屋庄二郎	豊田孫左衛門
小松五左衛門	七里鎌倉兵衛代
。千草屋久左衛門	牛尾養菴
真島隆徳	。
米屋助右衛門	千草屋久左衛門
小西新介	。
大西新次郎	。

岡田織悦	泉屋理兵衛
田中方葦	同 権右衛門
千草や千兵衛	金子市右衛門
同 朝藏	金子源二郎
同 平蔵	千草屋宗十郎
小泉多美衛	花崎彦六
岩田元卓	広屋徳右衛門
泉屋次郎右衛門	岡田矢柄
鴻池伝兵衛	小川屋喜太郎
高島屋喜兵衛	越ばせや万兵衛
岡田屋治兵衛	河内屋吉左衛門
加賀や作右衛門	千艸屋義輔
村瀬亀藏	加賀屋喜助
菅野尚太郎	松井和泉代
菅野順三郎	会所周助
。山城屋利兵衛	鈴木寿伯
升屋喜右衛門	谷口莊次郎
生田忠左衛門	平野や伊右衛門
古山厚斎	八尾与作
同 森之介	
清水弥太郎	

上乍園
候略元
儀以使御傳申付

朝比奈茂右衛門代	泉屋理兵衛
同 権右衛門	金子市右衛門
同 金子源二郎	千草屋宗十郎
同 花崎彦六	花崎彦六
同 広屋徳右衛門	広屋徳右衛門
同 岡田矢柄	岡田矢柄
同 小川屋喜太郎	小川屋喜太郎
同 越ばせや万兵衛	越ばせや万兵衛
同 河内屋吉左衛門	河内屋吉左衛門
同 千艸屋義輔	千艸屋義輔
同 加賀屋喜助	加賀屋喜助
同 松井和泉代	松井和泉代
同 会所周助	会所周助
同 鈴木寿伯	鈴木寿伯
同 谷口莊次郎	谷口莊次郎
同 平野や伊右衛門	平野や伊右衛門
同 八尾与作	八尾与作

無撫用事有之候
出付差可申候ニハ
怜ヲ差

川出源左衛門
同辰蔵

江邑大助

天王寺や伊右衛門

加賀屋治左衛門

鴻池栄三郎

瓦町二丁目
伊丹

漆屋六兵衛

茜屋四郎右衛門房氣二付代

布施庄左衛門

山本鹿藏

木村原藏

同直次郎

吉右衛門

丸岡古元

森川曹吾

山田宗湖

荒木伝治

千草屋善太郎

近藤一学

中西司馬太郎

同五郎右衛門
。升屋平次郎

助松屋新二郎

同七郎兵衛

。林専斎

保田玄脩

川上十郎左衛門

酒井健齋

同磯吉

近藤三右衛門代

日野や重五郎

左官市左衛門

屋根屋藤兵衛

鴻池善右衛門代

田嶋や安兵衛

奥野鴻二

小川屋原介

吹子や友三郎

伊勢や万兵衛

金谷与右衛門

小山田玄熊

紀伊国や政富

丸屋吉右衛門

佐伯和吉

二高清兵衛

千草屋新三郎

鳥橋小吾

鴻池善作

瀬田藤四郎

足立十右衛門

伊勢屋藤助

十時半蔵

村瀬亀藏

富田屋平右衛門

雜喉屋三郎右衛門

。茅原元常

鴻池善之助代

鴻池市兵衛代

住友吉次郎代

天王寺屋清八

近江屋五郎兵衛

浪花屋徳兵衛	伊丹
峯屋半兵衛	鹿島屋利兵衛
同	大塚千太郎
同	岩田忠石衛門
同	瓦屋茂兵衛
同	大和田屋善兵衛
木綿屋喜八郎	伝法屋忠兵衛
樽屋吉右衛門	同
丹波屋孫右衛門	同
玉屋平八郎	同
藻井泰藏	細井金蔵
袴屋千助	得不 ^{役用} _付 ^{御送葬}
小川屋義兵衛	鴻池伊兵衛
鴻池善五郎代	河内屋三右衛門
鴻池伊兵衛	竹屋甚右衛門
田中や喜右衛門	

昨日之御葬御見送可申答ニ
候得共當番ニ付不能其儀今
日八乍延引御悔旁參上仕候

辻 次郎右衛門
浅井和之丞
田中良民

病氣二付乍延引
御悔申上候

贊牧太

此間上京仕乍
延引御悔申上候

川井立牧

山下吉太夫

足立十右衛門

同犀太

安田屋甚兵衛
井筒屋平次郎
加島屋要助
窪田曹卿
姫路屋吉郎兵衛
粉川屋元三郎
八田五郎左衛門
桑原権九郎
和泉屋太兵衛
大島千駒
河内屋勘四郎
吉住富太郎
絆屋泉次郎
服部半兵衛
田中周安
油屋徳三郎
渡辺新蔵
三木佐渡守

中井竹山葬儀記録

竹山先生香儀簿

(仮題)

同	煮染	同	煮染
同	めし	同	めし
同	干紫蕨	同	金百疋
同	金二百疋	同	金五百疋
同	金五百疋	同	金五百疋
同	金三百疋	同	金三百疋
同	金三百疋	同	金三百疋

古林温秀	金崎七右衛門
鈴木治兵衛	山片平右衛門
藤田九郎兵衛	川北陽三郎
山片平右衛門	淡輪元潜
并河誠輔	篠田剛藏
南鑓一片	池上新助
金五百疋	西村仁右衛門
四匁三分	加賀や喜介
干薇	中井藍江
八匁六分	小西新助
湯葉	中川元吾
同	牛饅頭
同	餸燭
同	金百疋
同	醤油切手

同百疋	長谷川与市
山中和二郎	山中和二郎
鈴木次兵衛	藤田九郎兵衛
古山厚齊	鷺尾六左衛門
同	岡田織悦
同	尼崎や莊兵衛
同	中原敬作
同	村瀬亀藏
同	天樂先生
同	西島立敬
同	荒木善右衛門

長谷川与市	山中和二郎
藤田九郎兵衛	鷺尾六左衛門
岡田織悦	尼崎や莊兵衛
村瀬亀藏	中原敬作
天樂先生	西島立敬
同	荒木善右衛門
同	早野義三
同	雜喉や三郎兵衛

金百疋	八匁六分	南鎌一片
南鎌一片	南鎌一片	南鎌一片
南鎌一片	四匁三分	四匁三分
生花	金百疋	金百疋
湯葉	金百疋	金百疋
狗脊	金百疋	金百疋
酒券		
芋銀三匁		
南鎌三片		
南鎌一片		
煮染めし定		
金百疋		
南鎌一片		
南鎌一片		

八尾与作	南鎌一片
谷口莊二郎	南鎌一片
川出源左衛門	南鎌一片
岡橋丈輔	南鎌一片
渡辺鹿藏	南鎌一片
升屋惣兵衛	南鎌一片
山口平右衛門	南鎌一片
長島正平	古林秀蔵
長島正平	古林秀蔵
加賀やます	古林秀蔵
布施虎之助	古林秀蔵
神崎や清助	古林秀蔵
播磨や兵助	古林秀蔵
谷川達菴	古林秀蔵
永井藤四郎	古林秀蔵
大和や喜兵衛	古林秀蔵
樽や吉右衛門	古林秀蔵

南鎌一片	金百疋
白檀	金二百疋
南鎌一片	金二百疋

森田忠兵衛	岩田忠右衛門
木棉や喜八郎	大塚千太郎
谷平八	池上茂兵衛
岡田利兵衛	岡田孫右衛門
同豊田芳蔵	大村彦太郎
和田斎	吉見勇三郎
滝伴次	岡田や治兵衛
大村彦太郎	佐伯和吉
吉見勇三郎	佐伯和吉
岡田や治兵衛	佐伯和吉
大河左衛門志	并河左衛門志
渡辺貫	并河左衛門志
太田深造	并河左衛門志
中務	并河左衛門志
三木佐渡守	并河左衛門志
中務	并河左衛門志

金二百疋	四匁三分
銀三匁	四匁三分
銀式匁	四匁三分
金三百疋	四匁三分
南鎌十片	四匁三分
南鎌一片	四匁三分
南鎌三片	四匁三分
銀三匁	四匁三分
野菜	乾物
野菜	乾物
あつき餅	野菜
野菜	野菜
角湯葉	卷湯葉
道喜粽	卷湯葉
饅頭	卷湯葉

金崎市右衛門 中川卓次郎
竹島正三郎 金崎七右衛門
村津礼吉 中原ナリ
梁田八百吉 池上新助
藤井莊右衛門 淡路や弥太郎
石野充蔵 佐藤要蔵
角田才二郎 姫路や吉郎兵衛
菅野尚太郎 川北陽三郎
白木修蔵 助松や新十郎
蛇草内膳 加賀や作右衛門
鈴木治兵衛

金五百足	金五百足	金五百足	金五百足
銀三匁二分	銀三匁二分	銀三匁二分	銀三匁二分
饅頭切手	饅頭切手	饅頭切手	饅頭切手
四匁三分	四匁三分	四匁三分	四匁三分
野菜	野菜	野菜	野菜
金三百足	金三百足	金三百足	金三百足
小倉野二十	小倉野二十	小倉野二十	小倉野二十
四匁三分	四匁三分	四匁三分	四匁三分
羊肝券	羊肝券	羊肝券	羊肝券
野菜	野菜	野菜	野菜
南鑑一片	南鑑一片	南鑑一片	南鑑一片
酒券二枚	酒券二枚	酒券二枚	酒券二枚
白雪糕	白雪糕	白雪糕	白雪糕
麗餅	麗餅	麗餅	麗餅
酒滋飴一桶	酒滋飴一桶	酒滋飴一桶	酒滋飴一桶
酒一樽	酒一樽	酒一樽	酒一樽
尾張茶	尾張茶	尾張茶	尾張茶
銀四匁三分	銀四匁三分	銀四匁三分	銀四匁三分
柳川茶	柳川茶	柳川茶	柳川茶
里いも	里いも	里いも	里いも
金二百足	金二百足	金二百足	金二百足

梁田八郎右衛門 小山猪三太 松井和泉
加藤原輔 金崎七右衛門 平瀬久左衛門 富子助右衛門
朝日右文 吉見勇三郎 荒木伝二 千種や平蔵
山本彦三郎 中井雄右衛門 朝藏
真島隆徳 河内や六兵衛
中西司馬太郎 永井藤四郎 奥田少助

同

<懐徳堂関係研究文献摘要(3)>

大和や金兵衛
滋岡亀
一向僧可淨
小泉多美衛
岡田織悦
七里鎌倉兵衛

羊羹

饅頭券

茶一袋

虎屋落雁

金百疋

鹿呉茶

酒一樽

銀壱匁五分

松茸

南鎌一片

酒一陶

生姜糖

四匁三分

岡田彦兵衛
岡田卯左衛門
鴻池伝兵衛
藤田与市
小西新助

柳生長兵衛
池上新助
金山重左衛門

金十八両壹歩武朱
銀百十四匁九分

的基盤を前提としている、の三点である。

第一の点について、筆者はまず懐徳堂の定約からその学問観を検討し、特に壁書第六条から、庶民の学問の在り方として考えられている四つの型を導き出す。即ち、第一は一般庶民の学問、第二は、一定の生業が学問以外に予想される同志としての学問、第三は学問を専業として世に処する者の学問、第四は庶民学の否定態としての学問である。言うまでもなく、あるべき庶民学者の態様としては前の三つの型が望まれるが、まさにそのことこそ身分意識に対する学問意識の優越を意味する、と筆者は指摘する。なぜなら、第一から第二、更に第三の型へ、といふのが一般に学問意識展開の過程であり、かつ第二（兼業）から第三（專業）への転廻は、農工商などの原身分から専門学者へという、実質的な身分的変改への期待を含んでいるからで

(7)論文・竹安繁治「大阪町人思想史の一齣——学問意識と身分意識——」(『ヒストリア』第15号・昭和三十九年)

本論文は、近世大阪における町人思想の一面を、懐徳堂を中心として考察しようとしたものである。その視点は、①近世庶民階級における学問意識の発達は、封建的身分意識に対する学問意識の対抗、ひいては後者による前者超克の過程に認められる、②それは具体的には庶民学者における専業・兼業の問題として顕現している、③これらの事柄は、経済的発達という現実